

セラーズにおける語用論と認識論

笠 木 雅 史

本稿は二つの目的を有している。一つはウィルフリッド・セラーズの語用論的分析の先駆性を示すことであり、もう一つはその分析がどのような影響と洞察を彼の認識論に対してもたらしたのかを明らかにすることである。初めにセラーズの従来あまり注目されてこなかった論文「前提にすること (Presupposing)」を取り上げ、言語哲学における意義と先駆性を詳述する。次にその思想の彼の認識論に対する影響をまとめ、可能な批判に答えることによって、認識論に対する語用論的視点の有効性を素描して終える。

1. ストロークソンのラッセル批判とその展開

1954年に発表された論文「前提にすること」は、バートランド・ラッセルの記述理論に対する P・F・ストロークソンの批判に対して、セラーズが自身の見解を表明したものであり、その内容の大部分はストロークソンの分析の吟味に費やされている⁽¹⁾。それ故最初に、ストロークソンによるラッセル批判の内容を簡単にまとめておきたい。

この批判において、本稿にとって重要なのは以下の二点である。第一にストロークソンは、ラッセルが文とその使用を区別していないと批判する。彼は意味の担い手である抽象的存在者としての文と、その使用によって行われる主張ないし言明を区別する。ラッセルは、有意味な文に関してのみ真偽は問われうるとい見解をとりつつも、同時に語の意味はその指示対象に他ならないと考える。彼の記述理論は、「現在のフランス国王は禿である」のような一見指示対

象を欠いた文 (S) が現時点で発話された場合に、それを無意味なものとして排除せず、偽の文として処理する方法を提供するためのものである。しかしストローソンは、この発話が無意味ではないことから導かれるのは、文の有意性・真偽の問題と真偽の問題は独立だということだと指摘する。彼の見解では、真偽の問題は文ではなく、文の使用である言明に関してのみ問われうるのである。

第二の批判は、ある文によって論理的に含意されるものと、その文を用いて主張を行うために満たさなければならない条件をラッセルが混同しているというものである。この批判は、文 (S) と、その構成要素である命題 (P) 「たった一人のフランス国王が存在する」、並びに (Q) 「その人物は禿である」の関係をどのように考えるかという点に関する相違として現れる。ラッセルの分析では、文 (S) は (P) と (Q) を内含する (entail) と見なされ、それ故 (P) と (Q) の両者が真である場合のみ、(S) は真であるとされる⁽²⁾。ストローソンはこのラッセルの考えを、「現在のフランス国王は禿である」という発話によって、話者は同時に (P) と (Q) を主張していると見なすものと解釈する。しかしストローソンによれば、フランス国王が存在しない場合、すなわち (P) が偽である場合には、話者がこの文を用いて何かを語ろうとする人物が存在しないのであり、彼がその人物について何らかの主張を行っているとは見なすことはできない。この発話は無意味ではないにしろ、話者は真なる主張も偽なる主張も行っていないのである。それ故、誰かが今日 (S) を発話した場合に、「現在フランスに国王はいない」と返答することは、(S) を否定することではなく、「その言明が真であるか偽であるかという問いは端的に生じない (Strawson [1950], 145)」と述べることでストローソンは結論する。こうして、「たった一人のフランス国王が存在する」という条件 (P) は、(S) の使用である「現在のフランス国王は禿である」という言明が真か偽であるための条件の一つだと解されることになる。この条件が満たされない場合に (S) が発話されたならば、その言明は有意ではあるが真理値を欠いているのである。

「特殊な含意」ないし「前提」とも呼ばれる、内含とは異なるこの (S) と

(P)の関係を、ストローソンが正確にどのようなものとして考えていたのかは、あまり明瞭ではない⁽³⁾。しかし彼のアイデアは多くの論者に影響を与え、異なった形で展開されることになった。一つの立場は、この関係を「意味論的前提」と名付け、以下のように定義する。

ある文 **S 1** が文 **S 2** を意味論的に前提にするのは、**S 1** が **S 2** を必然化し (necessitate), **S 1** の否定が **S 2** を必然化するときであり、かつそのときに限る。それ故、**S 2** が真でなければ、**S 1** は真でも偽でもない。(Lycan, 80)⁽⁴⁾

ここでの「必然化する」という用語は、一方が真であれば、同様に他方も真でなければならない、ということを意味している。このように定式化されるならば、この意味論的前提という関係が内含と異なることは明白になる。**S 1** が **S 2** を内含する場合、**S 1** は **S 2** を必然化するが、**S 2** が偽であるならば、**S 1** も同様に偽でなければならないからである。ラッセルの元の例を用いて言えば、(S) ないしその否定は (P) を意味論的に前提にする。(S) の真偽は、「たった一人のフランス国王が存在する」という文 (P) が真である場合のみ、その人物が禿なかのどうかに応じて定まるのであり、前者が偽であるならば (S) は真でも偽でもなく、真理値を持たないことになる。

ロバート・スタルネイカーは、1973 年と 74 年に発表した二つの論文において、意味論的前提という概念を用いて言語学者や哲学者が説明しようとした諸現象を、語用論的観点からより効果的かつ自然な仕方でも説明できる概念を与えようと試みた。この概念は「語用論的前提」と名付けられ、意味論的前提との相違は、後者がその名が示すように真理条件によって定められる、文、ないし命題間の関係であるのに対し、前者は言語使用者と命題の関係として、つまり、ある文脈における発話者ないし対話者が当の命題に対して持つ一種の命題的態度として捉えられているという点にある。この意味での前提とは、言語使用者がある言明を行ったり聞いたりする際に、その真理を当然のことと見なす (take for granted), あるいは見なししているように見える命題の集合であ

り、背景的信念の一種であると、スタルネイカーは説明する。

さて、既にポール・グライスが強調したように、我々の行う会話や意見交換は、その参加者が特定の目的のために協力し合い、会話を特定の方向へ押し進めることによって営まれる共同の実践である。グライスはこの洞察に基づき、相互の会話が可能となるために守られなければならない条件を「参加している言葉の交換の承認された目的ないし方向が要求する会話への貢献を、それが要求される段階で行え」という原理、いわゆる「協調原理 (**Cooperative Principle**)」として定式化した⁽⁵⁾。周知のようにグライスは、この原理に属する諸原理をさらに細かく「会話の格率」として定式化し、何を言ってはならないか、何を会話の含みとしてはならないかを具体的に分析している。

スタルネイカーの「語用論的前提」という概念は、このグライスの洞察を継承するものである。彼は、「コミュニケーションは、言語的なものであれそうでないものであれ、話者とその聴衆によって共有され、かつ彼らによって共有されていると認識されている諸信念、ないし諸想定を背景にして通常行われる (**Stalnaker [1974], 48**)」という事実に向けを。さらに言えば、話者と聴衆が当然のことと見なす共通の根拠が多ければ多いほど、コミュニケーションはより円滑に行われるのである。スタルネイカーは、どのような情報が当然のことと見なされるのか、またはどのような他方の持っていない情報を伝えようとするかによって、会話の方向は決定されると述べる。例えば、ある話者が「今度の選挙ではもう自民党に投票しない」と主張した場合、対話者は彼がかつての選挙で自民党に投票し、彼が期待した活動をその後自民党が行わなかったと推測する。それ故会話は、彼が今回投票しない特定の理由、例えば自民党の政策への不満を巡って行われることになるはずである。もしこの発話者が、前回の選挙で自民党に投票していないか、自民党の政策に賛成しているのにこの主張を行ったならば、彼は会話の目的ないし方向を自覚しておらず、彼の発話は非合理的だと非難されるであろう。このような観点からスタルネイカーは対話における語用論的前提の必要性を、グライス流の「合理的なコミュニケーションの一般的格率 (**Stalnaker [1974], 50**)」からの要請として捉え

る。それ故、語用論的前提は、少なくとも合理的に会話を行うことを目的とする文脈において、どのような発話を行うのが正しいのか、あるいは正しくないのかという点に関する制約であり、以下のように特徴付けられる。

文 **S** が命題 **P** を前提にするのは、発話者が **P** を前提にしない文脈において、**S** を使用することが不適切 (*inappropriate*) であるであろうときであり、かつそのときに限る。(Stalnaker [1999], 7)

ストローソンはラッセルに対して、文とその使用の区別を強調しながらも、彼の言う前提関係は主張の真偽に関わるものとされていた。後者の点を継承したものが意味論的前提であるとするれば、前者を重視し、言葉の使用の適切性という語用論の方向へと展開したのがスタルネイカーだと言うことができるであろう。

2. セラーズのストローソン批判

セラーズはストローソンの分析を、主に二つの点で批判する。第一の点はストローソンが確定記述の指示の文脈依存性を、「私」、「ここ」といった指標詞や指示詞の指示の文脈依存性と同列に扱ったことに対する批判である。しかし、本稿においてこの点は特に重要ではないので、第二の批判点に焦点を絞って見ていくことにしたい。セラーズは次のような会話の検討から議論を始める。

トム :「ハリーは彼の祖母を殴打するのをやめた」

ディック:「そうではない」

セラーズが述べるように、このトムの発話は、「ハリーがかつて祖母を殴打した」という情報 (**S1**) と、「ハリーは現在祖母を殴打していない」という二

つの情報を担っている。トムの発話 (S2) と (S1) の関係は、ストローソンの言う前提関係の一例であり、(S2) は (S1) を前提としている。ストローソンは一般に、(S1) が不成立であるとき人々は (S2) を偽であると言わないということから、ディックがこの返答によって (S1) を否定しているならば、(S2) の真偽についての問いは生じないと結論した。セラーズはこの推論を批判する。

しかしながらそのような推論は、ある発話についてそれが偽であると言
うことが誤りであるならば、この発話が偽であると想定することは誤りで
なければならぬという考えに依拠しているのであろう。このことは、少
なくとも疑わしい。たとえあることが真であってもそれを言うことが誤り
であるような多くの理由が存在する。その幾つかは、倫理に属し、他の幾
つかは儀礼に属する。幾つかはしかしながら、議論ないし論証における合
意に到達するための手段として、談話を支配する規約であり、それ故適切
な意味で、論理的な理由なのである。([1954], 205)

(S1) が不成立である場合、ディックが (S2) を否定しない理由を、(S1) を信じる根拠を持っていないならば、彼はトムの主張を偽であると言うことを不適切だと見なすからだ、セラーズは分析する。この分析によれば、(S2) を否定することが不適切であるということから、(S2) は偽ではないとストローソンは結論しているのであり、この推論は妥当ではない。ある発話の真偽と、その発話を行うことが適切か否かという問題は、あくまで区別されるべきもののなのである。

セラーズはストローソンの提起した前提という概念の重要性を認めつつも、(S1) が偽であるならば、(S2) も同様に偽であると考ええる点で、ラッセルに賛同する。前提とは、命題の真偽ではなく、むしろある文脈における発話の適切性に関わる概念だとセラーズは考えるのである。ストローソンの思想に対するこのようなセラーズの態度は、発話の真偽という意味論的次元とその適切性

という語用論的次元を区別し、後者に関わるものとして語用論的前提という概念を提唱したスタルネイカーと著しい共通性を持っている。スタルネイカーは前提という関係を、言語使用者が当然のことと見なし、信じているという使用者と命題の関係として捉えた。セラーズもストローソンの前提という概念には曖昧さがあると指摘し、彼自身の定式化を行っているが、そこでは同様に発話者が自身の発話の前提となる命題を信じているかどうかという観点から前提関係は理解されている。話者トムが上記の発話を行う場合、「彼がハリーはかつて祖母を殴打したと、そしてディックがこの信念を共有していると信じていなければ ([1954], 206)」ならず、そうでない場合、つまりトムが (S1) を信じていないにも関わらず (S2) を主張したならば、それは不適切な言語行為であるというのが、セラーズの前提という概念の理解なのである。

このようにセラーズはスタルネイカー同様、主張の真偽と、主張を行うことの適切性という語用論的次元を区別し、両者を独立的な事柄だと考える⁽⁶⁾。それ故、真偽の次元と「議論ないし論証の力学 ([1954], 207)」, すなわち語用論的な発話の適切性という本質的な区別を行っていないということがセラーズのストローソンに対する第二の批判となる。

両者の共通点は、これだけに留まらない。既に上の引用で述べられているように、この発話の適切性の基準は、セラーズが「合理的談話 (**rational discourse**)」と呼ぶ、「熟慮の上での信念の一致 (**reasoned agreement in belief**)」をもたらすことを目的とする談話 ([1954], 210, 注7)を行うための規約によって定められると見なされている。この概念については後に詳しく触れるが、ここには語用論的前提を「合理的コミュニケーション」を行うための格率の要請であるとしたスタルネイカーと同様の思想が見られるのである。また、スタルネイカーは特定の話題について会話が行われるためには、前提となる命題が発話者と対話者の間で共有されていることが必要だと考えた。セラーズも同様に、前提は発話者と対話者で共有されていなければならず、対話者の返答も、前提となる命題を信じているのか否かという観点から適切性が評価されると考える。それ故上記の会話において、「もし彼がハリーがかつて祖母を殴打

したと信じており、かつ「それは誤りだ」というための彼の理由として、「ハリーは悪質な行いを続けている」という信念を持っていないならば、この同一の規約によってディックが「それは誤りだ」と言うことは正しくないのである（[1954], 206）⁸⁾、と述べられるのである。

さらに、スタルネイカーは何が前提にされるかは、会話の目的によって決定され、同時に何を前提するかに応じて会話の方向は決定され则认为た。セラーズもしばしば会話が特定の目的のために遂行されると語り⁷⁾、また前提に応じて会話の方向が変化することを明示的に語っている⁸⁾。

スタルネイカーが語用論的前提という概念を提示したのは、セラーズの論文が発表されてから、およそ20年も後のことである。彼の批判対象である意味論的前提という概念が流布する以前に、セラーズはスタルネイカーを先取りするような発想を持っていたのであり、この点が現在ほとんど話題にされないことはいささか残念なことに思われる⁹⁾。以下では若干視点を変えて、この分析がどのように彼の認識論と関連するのかをまとめ、同時に認識論に対する語用論的ファクターの重要性を探る。

3. 語用論的分析と認識論

セラーズはプラトン以来の古典的な定義を支持し、知識を「正当化された真なる信念」だと考える。この「正当化」という概念をどのように理解するかは論者によって様々だが、セラーズの立場に特徴的なのは、彼があくまで正当化を、自己の主張に対して理由を与えるという言語行為を中心に考えていこうとする点にある¹⁰⁾。

セラーズは主張が知識の表現であるためには、「権威を持っていないなければならない（[1963], 167）」と考える。この権威という概念は、他の言明を推論する前提となったり、他の主張を正当化するために用いられうるという性質を意味している。ある話者の主張が一般に権威を持つことが可能になるのは、言語共同体が彼の主張を、真である可能性が高いという意味で信頼可能なものと

見なし、「許容し、支持する（[1963], 168）」からであり、セラーズはその信頼可能性を「言語が学習される仕方の産物である（[1975], 326）」と見なす。つまり、言語学習の過程を通じ、我々が一般に適切な言語行動を示すように訓練されることによって、我々の主張に対して信頼可能性は付与されるのである。

それ故、特に問題のない状況においては、我々の発話は信頼可能なものとして扱われ、権威を与えられるという意味で、知識の表現だと見なされる。他者から「問いを発し、それに対する回答を求める（[1974], 98）」という要求があった際に、自己の主張を正当化できない場合のみ、権威の付与は撤回され、彼はそれを知ってはいなかったと判断されるのである。セラーズにとって正当化とは、このような要求に対して、「自己の主張を裏付ける責任を承認（[1954], 214, 注 9）」し、他者に対して自らの主張の権威を示すことによって、その承認を再び求めるという行為である。このように知識のための正当化の必要性は、ある主題についての合意を目的とする「合理的談話」という実践の中での、他者に対する話者の認知的責任という観点から理解される。この責任を果たすことによって、互いの主張を承認し、共有するという相互承認こそが、ある主張ないし信念が知識と見なされるかどうかを決定するのである。

セラーズは自身の合理的談話に関する語用論的分析を、「日常的な議論における主張と返答（the give and take of everyday argument, [1954], 198）」の分析だと見なしている。知識の帰属とその撤回をもまた、このような日常実践における要求と応答に基づいて考えてゆくセラーズの認識論には、かつてオースティンの語用論的分析に対してなされたのと同種の批判が投げかけられるかもしれない。オースティンは「知っている」という語の日常用法を詳しく分析し、今日「関連性を持つ代替可能性説（relevant alternative theory）」と呼ばれる理論を提唱した⁽¹¹⁾。その分析によれば、「P であると知っている」という語が、ある認識主体 S に適用されるためには、S が P と両立不可能なあらゆる可能性を排除することができる必要はなく、ただその文脈での目的に適う程度で主題 P と関連性を持つ代替可能性だけを排除できれば

良いとされる。例えば日常的な状況において、ある鳥を眺めて、それをスズメだと **S** が発話した場合、その鳥が一見本物のスズメと区別できないほど精工に作られた模型であるという可能性を排除しう理由を **S** が持っている必要はない。その鳥がカラスやハトであるといった、その状況で関連性を持つ代替可能性だけを、その形態や色合いから排除できれば良いのである。

このようなオースティンの見解に対して、彼は「知っていると言う」ための基準を提示しただけであり、実際に「知っている」か否かを判定する基準を提示したわけではないという根強い批判が存在する⁽¹²⁾。この批判の根本にあるのは、日常的な実践における知識の帰属には、雑多な実践的ファクターが関与し、それ故知識の判定基準としては十分ではないという考えである。何が関連性を持つ代替可能性と見なされるかは、対話者の関心や信念といった主観的ファクターに応じて変化する。例えば、ある地域には一見普通のスズメと区別不可能な野鳥が生息しているとしよう。この地域を訪れた旅行者が、野鳥に興味を抱かずにそれをスズメだと言い、特に反対する理由を持たないために、他者がそれを知識として承認するという事は起こりうる。また、ある主張に基づいて緊急に行為の決定を行わなければならないという状況では、その主張のあらゆる代替可能性を排除するためには精密な調査が必要となり、あまりにも手間やコストがかかるという経済的な根拠で、厳密な基準が適用されないという場合も存在する。認識論において問題となる、ある主張ないし信念が知識として十分かどうかの判定基準は、このような実践的ファクターとは独立という意味で理論的な、客観的基準でなければならないと批判者は主張するのである。

筆者の見解ではこのような批判に対し、セラーズの語用論的分析の内部から再反論を行うことが可能である。最後にそれを簡略ではあるが素描し、本稿を終えたい。第一に、少なくとも一部の語用論的前提は、任意に決定される単なる主観的なファクターではない。対話の主題が、参加者の関心や目的に応じて定められるとしても、対話が一定の目的と方向を持つためには、その論理的要請として、特定の信念を前提にせざるをえない。セラーズは例えばある理論を帰納的に確証するという目的で営まれる科学的探究が、観察報告の権威を承認

しなければならないという意味で、後者を方法論的に前提にすると述べる⁽¹³⁾。もちろん科学者が個別的な観察データの信頼性を疑うことはありうる。しかしその場合、その認知的身分が問題にされる評価の対象は、理論から問題の観察データへと変化しているのであり、またその場合でさえ、特定のデータについての認知的な評価を行いうるためには、他の観察データとの不整合性や測定道具の信頼性についての信念を前提にしなければならない。我々の認知的評価は文脈に応じてある一定の前提に基づいて初めて可能になるのであり、その前提を疑うことは、単に主題を変えることを意味するのである。

第二に、どの程度厳密な評価基準が採用されるべきなのかも、対話における合意から独立ではない。ある状況で日常的な基準よりも厳密な基準が採用されるということはあるにせよ、その状況で関連性を持たない稀な可能性を提起して、話者がそれを排除できるかどうか試すことは、それ自体不適切な行為である⁽¹⁴⁾。合理的な談話においては、話者だけではなく対話者も、認知的な責任を負っているものでなければならない。つまり、ある可能性を提起して評価基準を高めるためには、その可能性が成立していると言うための理由が、対話者の側に要求されるのである。話者がその理由を受け入れて始めて、正当化の必要は生じるのであり、そうでなければそのような稀な可能性を問題にする必要性を正当化する責任を、対話者に課することができるのである。

第三に、知識の帰属が、後に得られた情報に基づいて撤回されることがしばしば起こりうるにしても、このことは対話における間主観的な承認とは独立に、知識に対する客観的な基準が存在しなければならないということを意味しない。セラーズの描き出す合理的談話は、その進行の中で主張の権威が撤回され、またその再回復が行われる動的な過程であり、この点においてセラーズは可謬主義を受け入れる。このような観点からすれば、いかなる知識であれ、適切な批判を受け止めることによってそれが放棄、または修正される可能性は、常に将来の対話に対して開かれていることになる。その可能性が存在しないならば、知識は単なる臆見や無根拠な思い込みと相違のないものになるであろう。セラーズの見解では、我々の知識がその名に値する合理的なものであるの

は、この新たな自己修正の可能性に常に開かれているからなのである⁽¹⁵⁾。

ある信念ないし主張が正当化されているかどうか、すなわちそれらの知識としての身分が重要視され、問題となるのは、何よりも他者との対話においてあるという思考が、セラーズの認識論の根底には存在する。彼の語用論的分析はこの対話の具体的分析として、認識論に対して現在なお重要な洞察を与えるように思われるのである。

注

- (1) なお、この論文はストローソンからの応答と共に公刊された。cf, **Strawson** [1954].
- (2) 本稿では、論理的ないし厳密含意を意味する **entailment** には「内含」という訳語をあて、より広い意味の **implication** を「含意」と訳し、区別する。
- (3) この名称はそれぞれ、**Strawson** [1950], 145., [1952], 175. に見られる。
- (4) ライカンは「意味論的前提」という概念の批判を行っているが、ここでは標準的な定義として引用した。より詳しくは、この概念の提唱者の手による **van Fraassen** [1966], [1968]などを参照されたい。
- (5) **Grice**, 26. なおグライス自身のラッセル・ストローソン論争に関する見解は、**Grice**, 248–268. で述べられている。グライスの分析では、問題の (P) と (S) の関係は「会話の含み (**conversational implicature**)」の一種とされる。
- (6) この論文でセラーズは真偽という概念をどのようなものとして考えているのかを明示していない。後年セラーズは、一般的意味論的規則に従うという意味で、「正しく主張可能」ということが真理概念の実質だと考えた。この「意味論的主張可能性」という概念は、より文脈特定の規則に支配される「対話的主張可能性」からの抽象であるとされる。ここで発話の適切性に関わると言われるのは、後者の概念である。cf, [1967], 122–123.
- (7) 例えば, [1980], 352. など。
- (8) [1954], 207–208.
- (9) ただし、セラーズがグライス、スタルネイカーとあらゆる言語観ないし哲学を共有しているわけではない。とりわけセラーズの言語哲学からのグライス批判に関しては、**Rosenberg** [1974], ch. 2., **Gauker** を参照。
- (10) このことは [1980], 135. において明快に述べられている。
- (11) cf, **Austin**. なおセラーズとオースティンの分析の親近性については、セラーズ自身が言及している。cf, [1975], 332–334.
- (12) この批判は幾人かの論者が行っているが、特に **Stroud**, ch. 2. が挙げられる。

- (13) この概念について詳しくは, [1963], 20., 並びに [1979], 178–181. を参照のこと。この概念は認識論における文脈主義者の提唱者の一人, マイケル・ウィリアムズの「方法的必然性」と類似した概念である。cf, Williams, [1992], 121–125, ch. 5.
- (14) 2節で見たように, 理由もなしにある話者の主張を否定することは, 不適切な言語行為だとされる。その根拠を対話者の認知的責任に対する要求に由来すると解釈することは可能であるように思われる。この対話者の責任という概念は, 近年セラーズの影響下にある論者によって強調され, 特に懐疑論に対する反論において用いられる。cf, Rosenberg [2002], ch. 1, 4., Williams [2001], 149–150, 161.
- (15) [1963], 170.

参考文献

(セラーズの引用に際しては年号と頁数だけを付した。他の著者からの引用は, 著者名と頁数を付し, 必要に応じて年号で区別する。なお原典とリプリント版が併記されているときは, 後者のページ数を指示する。)

Sellars, W [1954] “Presupposing”, *Philosophical Review* 63, 197–215.

———. [1963] *Science, Perception and Reality*, Routledge and Kegan Paul, republished by Ridgeview Publishing Company, 1991.

———. [1967] *Science and Metaphysics: Variations on Kantian Themes*, Routledge and Kegan Paul, republished by Ridgeview Publishing Company, 1992.

———. [1974] *Essays in Philosophy and its History*, D. Reidel Publishing Company.

———. [1975] “The Structure of Knowledge”, in *Action, Knowledge and Reality: Studies in Honor of Wilfrid Sellars*, ed. by Castañeda, H., Bobbs-Merrill Company, 295–347.

———. [1979] “More on Givenness and Explanatory Coherence”, in *Justification and Knowledge*, ed. by Pappas, G., D. Reidel Publishing Company, 169–182.

———. [1980] *Pure Pragmatics and Possible Worlds: The Early Essays of Wilfrid Sellars*, ed. by Sicha, J. F., Ridgeview Publishing Company.

Austin, J. L. [1946] “Other Minds” in his *Philosophical Papers*, third edition, 76–116, Oxford University Press, 1979.

Gauker C. [2003] “Social Externalism and Linguistic Communication”, in *Meaning, Basic Self-Knowledge and Mind: Essays on Tyler Burge*, ed. by Frápolli, M. et al., CSLI Publications, 1–33.

- Grice, P. [1989] *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press.
- Lycan, W. [1980] *Logical Form in Natural Language*, MIT Press.
- Ostertag, G. (ed.) [1998] *Definite Descriptions: A Reader*, MIT Press.
- Rosenberg, J. F. [1974] *Linguistic Representation*, D. Reidel Publishing Company.
- . [2002] *Thinking About Knowing*, Oxford University Press.
- Russell, B. [1905] “On Denoting” in Ostertag, 35–50.
- Stalnaker, R. [1973] “Presuppositions”, *Journal of Philosophical Logic* 2, 447–457
- . [1974] “Pragmatic Presuppositions” in *Pragmatics: A Reader*, ed. by Davis, S., 471–481, Oxford University Press, reprinted in Stalnaker [1999], 47–62.
- . [1999] *Context and Content*, Oxford University Press.
- Strawson, P. F. [1950] “On Referring” in Ostertag, 135–160.
- . [1952] *Introduction to Logical Theory*, Methuen.
- Stroud, B. [1984] *The Significance of Philosophical Scepticism*, Oxford University Press.
- . [1954] “A Reply to Mr Sellars’ “Presupposing””, *Philosophical Review* 63, 216–231.
- van Fraassen, B. C. [1966] “Singular Terms, Truth Value Gaps and Free Logic”, *Journal of Philosophy* 63, 481–95.
- . [1968] “Presupposition, Implication and Self-Reference”, *Journal of Philosophy* 65, 136–152.
- Williams, M. [1992] *Unnatural Doubts: Epistemological Realism and the Basis of Scepticism*, Princeton University Press.
- . [2001] *Problems of Knowledge: A Critical Introduction to Epistemology*, Oxford University Press.